インストラクター委員会・塩山一美委員長に聞く

withコロナ、afterコロナの時代に インストラクター委員会に期待される役割

(公社)日本プロボウリング協会(JPBA)の事業として、トーナメント開催とは別にもう一つ大きな柱が、インストラクター事業だ。協会副会長であると同時に、インストラクター委員会の委員長を務める塩山一美プロ(34期)に、コロナ禍の困難な時代に、委員会としてどんな役割を果たそうとしているのかを伺った。

コロナが収束しても ボウラー減少の不安

協会の役職とは別に、普段は大学ボウルの総支配人として、土浦本店と水戸店の2店舗の経営にも携わっている。まずは茨城にも発出されていた緊急事態宣言の影響について聞いた。

「営業時間が午後8時までに制限されて、夜のリーグや大会ができない影響がものすごく大きい。4割減、5割減ぐらいになっています。ボウラーにしてもリーグや大会がないとモチベーションが上がらないので、練習にも来てもらえないです」

もともとオープンボウラーは2～3割で、マイボウラーの比率が高いそうだが、コロナが収束しても、既存のボウラーが帰ってきてくれる確信はない。

「これまで平日の夜にやっていたプロチャレなどを、土曜や日曜の昼間にやってみたけど、手応えとしては半分いかないかなという感じです。最近水戸店で試しているのは、健康リーグに参加されている方にアンケート調査をして、質問や要望を吸い上げてそれに一つひとつ応えていくこと。1回目が15人、2回目は19人と、返ってくるアンケートが増えているので、ニーズはありますね。今来ていただいているお客さんをいかにケアできるかという、原点に返った取り組みも必要だと思います」

実効性のある組織へ 制度改革に取り組む

JPBAのインストラクターにはA級、B級、C級という区分があるが、それぞれの違いが明確ではなかった。

「この5年くらいでシステムを見直し、改革をしてきました。USBC(全米ボウリング協会)や日本スポーツ協会のコーチ資格も取り入れながら、例えばA級は、スポーツ協会のコーチ3、USBCのブロンズコーチを持っていることが条件で、その資格があれば、国体の監督やコーチもできます。システムがほぼ確立したので、今年からさらにそのなかに、技術的な指導に特化したプロコーチのシステムを作ろうと動き始めています」

▲8月22日に東京・サンスクエアボウルで行われた夏休みジュニアボウリング教室　©JPBA

またアマチュア、とくにセンターで働くスタッフを念頭に、認定インストラクターの制度を設けている。

「認定1、2級インストラクター資格取得講習会を、10会場で順次開催中です。コロナ禍ということで、PCR検査を受けた上で受講するという形にさせてもらいましたが、予想を上回る120名の応募がありました。健康ボウリング教室にかかわるスタッフの育成が主な目的かと思います。8月にリモートで開催した健康ボウリング教室の公認講師講習会にも、58名の参加者がいて驚きました。この状況のなかでも健康ボウリングをしっかり確立していくために、動き始めているんだなと思いました」

両手投げ時代への 対応が今後の課題

シニア層の開拓には、健康ボウリング教室というある程度確立したシステムがあるが、ジュニア開発には、JPBAのインストラクター委員会が主導する形で1997年に(2013年からは(公社)日本ボウリング場協会との共催)スタートした、春、夏、冬休み期間のジュニアボウリング教室がある。

「メインは夏休みです。コロナの感染拡大で昨年は中止になり、今年もコロナ前と比べ実施センターも参加人数もかなり少ないですが、17都道府県の35センターに、3000人余りの小中学生が参加しました。以前は開催しても次の目標がなかったので、5年ほど前からはスコアチャレンジを実施して、ランクによって1級、2級、3級のバッジを贈呈するバッジシステムを導入しました。上の級を目指すことが、翌年までのモチベーションになればという狙いです」

▲講習会で講師を務める塩山委員長　©JPBA

ジュニアの開発・育成は、すぐには収益につながらないということで、かつては力を入れる経営者は多くなかったと聞く。

「少し長い目で見ると、子供のうちに経験していることが、社会人、あるいはシニアになって…と、後々につながることを理解してくれるようになって、4年前から日場協とプロ協会が合同で“ジュニアボウリングアカデミー”という形で、ジュニアの指導者育成に取り組み始めました」

そこで今ネックとなっているのが、両手投げの指導だ。

「USBCのシルバーコーチを取りにアメリカに行ったときに、やっぱり両手投げの話になりました。一口に両手投げといっても、いろいろなタイプがいるし、リズムの取り方は十人十色。向こうでも統一した指導法はまだ確立されていないといっていました。それでも両手投げの時代は確実にきています。だからインストラクターやコーチもどんどん研究してスキルを上げていかないと、われわれの方が流れから取り残されかねないです」

訃報 “ドリルの神様”高田誠氏が永眠

日本ボウリング界におけるドリラーの草分けで”ドリルの神様”と称された高田誠氏が9月5日、永眠した。享年86。時節柄、葬儀はすでに近親者のみで執り行われたという。

☆

高田氏は1935年(昭和10年)5月24日、長崎県の生まれ。学生時代は野球に打ち込み、佐世保北高から早稲田大学に進学したが、1年時にボウリングと出合い、卒業後はアマチュアボウラーとして全国レベルの大会で活躍した。

その後、ボウラー仲間の渡邉保氏(現ABS会長)の誘いでボウリングボールの輸入販売を手伝ったのをきっかけに、ドリルの世界に足を踏み入れる。単身渡米して技術を学び、帰国後は日本ブランズウィック社と契約して全国各地のセンターをキャラバンで回った。また、長年にわたって日本のみならず、アジア各国でドリラーの育成にも尽力した。

近年は「日本のボウリング場第1号は1861年(文久元年)6月22日、長崎に開業したインターナショナルボウリングサロン」とされる従来の定説に疑念を抱き、本業の傍ら故郷・長崎に何度も足を運んで調査・研究に没頭。10年の歳月をかけて新事実を発掘し、昨秋『ボウリング発祥の地の謎』と題した小冊子を自費出版した(本紙でも昨年11月号で新事実の概要を紹介=**右写真**=)。

その労苦を称えると同時に、高田氏の歴史的発見を広く世に知らしめるべく、実は朋友の白石雅俊氏(日本ボウラーズ連盟理事長)が発起人となって、祝宴の準備が進められていた矢先の訃報だった。

謹んで故人のご冥福をお祈りいたします。

▲本紙昨年の11月号にインタビュー記事を掲載　ホームページ(b-jweb)のバックナンバーでご覧いただけます